



金澤 泰子 (かなざわ やすこ)

書家・金澤翔子氏の母。1943年、誕生。1966年、明治大学卒業。1977年、書家・柳田流家元に師事。1985年、翔子誕生。1990年、東京に普通教室開設。著書「天使の正体」、「天使がこの世に降り立てば」「金澤翔子の一人暮らし」をかまくら春秋社、「翔子の書」を大和書房、「翔子」を角川マガジンス、「涙の般若心経」を世界文化社、「心は天につながっている」、「悲しみを力に」をPHP研究所、「金澤翔子」を平凡社、「つきのひかり」を美術出版社、「共に生きる 金澤翔子」を芸術新聞社などを多数出版。久が原道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。



■心は孤独な数学者
藤原正彦／著 新潮社
1997年
版元品切れ・文庫版刊行中

天才数学者は神の光を見たかった

我が子の障害を奇跡で治してくれと神に執拗に祈り、神の光を見たいと希求していた頃、「数学者は神の声を希求している」の一文を目にしてこの本を買った。

ベダンチックな言葉で展開される、稀代の天才数学者・ニュートン、詩人で数学者のハミルトン、敬虔なヒンズー教徒のラマヌジャンの三人の物語。

私はワクワクと一気に読み終えた。

1642年ニュートンはガリレオ・ガリレイの亡くなった年に生まれる。イギリスでは魔女狩りが吹き荒れていた時期で、デカルト、ケプラー、パスカル等々、キラ星のごとく天才が出現した時代であった。レンブラントの「夜警」もこの頃に描かれた。1665年のパンデミック（ペスト）で大学が閉鎖され感染から逃れるために故郷に帰り孤独の中でリンゴが落ちるのを見て、かの有名な万有引力を発見した。

1687年に自然科学の歴史で最も重大な自然哲学の数学的原理「プリンキピア」を完成させた。当時、流行った「薔薇十字会」に入り神秘主義と錬金術と数学を統合して自然への洞察を得て「天使を呼び出し神の声を聞こう」としていた。科学界に君臨する栄誉も富も得ていたけれど、その心は孤独に苛まされ84才でなくなった。

ハミルトンは数学者で詩人であった。幼少時から天才の様をしていた彼が部屋に入って来るとそのオーラにより辺りがパツと明るくなったと記されている。19才で陥った美しい人とのままならない恋を30年以上も激しい情熱と執念で追い続ける。この強烈な情緒と執念で数学にも立ち向かった。1843年、閃きにより四次元数の基本式を橋の端に刻んでいる。この発見から20年を経て60歳でなくなる。

1887年ラマヌジャンは熱心なヒンズー教徒として生まれる。ほとんど独学である。純粋数学は全ての学問のうちで最も美しさを必要とすると説いている。

三人共深く神を信仰していた。最も論理的な数学者がもっとも非論理的な神に依拠していた。そして三人は悲劇的な生活であり、寂しさに貫かれた一生であった。

天才の生涯は孤独であることが痛感させられる本であった。



図書館と私 ④

～まちの中での場の創出～

第1回
(全4回)

織田 寿太郎 (おだ じゅたろう)

【プロフィール】

平成25年4月に豊島区入区。
平成31年に図書館課に配属。
大学で博物館学芸員資格を取得。



「移動図書館の歴史」

図書館は、多くの人にとって身近な場所であり、多くの人に利用されるべき場所です。しかし、豊島区立図書館は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一時的に閉鎖せざるを得ない時を経験しました。その際に、多くの利用者から「図書館を開館して欲しい」とのご意見をいただきました。いつでも誰にでもひらかれた場所である図書館は、持続可能な運営ができる体制を整えていく必要があることを痛感するとともに、ある存在を思い出させました。社会情勢の変化への対応と図書館の内外にとらわれず読書環境を整備するために誕生した移動図書館です。

かつて図書館は多くの人にとって遠い存在でした。戦前の日本の図書館の多くは入館料を徴収し、館内閲覧がもっぱらで、貸出は有料であったり、貸出を利用できる者の資格を制限していました。戦後、「図書館はなにをすべきか」という模索が始められ、整理中心・保存中心の図書館からサービス中心の、市民に喜ばれ愛される図書館への転換が叫ばれるようになりました。しかし、当時はまだ図書館の数が少なく、また庶民の身近な生活空間に必要な不可欠なものであるといった認識も薄く、社会の土壌が「身近な図書館」を育てられるほど成熟していませんでした。そこで期待されたのが移動図書館です。図書館の数が少ないという状況を打破し、図書館サービスを多くの人に行き渡らせるため、都内では1965年以降、続々と移動図書館が誕生し、豊島区においても66年から「あけぼの号」が導入され図書館事業を支えました。しかし90年代に入り、各自治体で図書館網が整い始めると、移動図書館は相次いで廃止され、「あけぼの号」も94年に運営を終えました。

歴史的役割を終えたように思われる移動図書館ですが、「誰一人取り残さない、誰もが主役になれる」豊島区の「にぎやかな公共図書館」を目指すため、まちのあらゆるところに読書の楽しさに触れることができる機会を創出する場として、その存在を見つめ直す必要があるのかもしれない。

今回のテーマ

祝い

Café KONOHON
この本カフェ

27 杯目

世界のお祝いの文化はじつに多様だが、
集団でその祝う気持ちを分かち合うという点は
共通している。そこには儀礼や作法という形をとった
「ことば」がある。大きく見れば、ことばでつくられる本も
人間の生を寿ぐものにも思えてくる。



書名『諏訪の御柱—陰陽五行に秘められた諏訪信仰と古代史の謎—』

田中清文著 ほうずき書籍 2016年

寅年の今春、信州・諏訪地方は6年周期での第205回諏訪御柱祭。1200年の歴史の諏訪大社「式年造営御柱祭」では、凝縮された3か月の間に諏訪人気が発露する。残雪の山出し、氏子の里曳き、急斜面落下の圧巻の木落し、総締めの上社・下社に16本の建て御柱と、その壮健な流れは江戸時代から。

本書では、陰陽五行が秘められたこの基層諏訪信仰を古代の諏訪祭政体態とみる。その天人相関の思想は、全国8000余の諏訪神社の祭祀として形をなしている。さらに、諏訪地方などで発掘された銅鐸・鉄鐸や、周辺の道祖神、石皿・石棒など諏訪文化とこの思想的源泉との関連の示唆も、非常に興味深い。

⇒【中谷 範行 (なかやのりゆき)】



書名『小笠原流 やさしさが伝わる日本の礼法』

前田紀美子著 玉川大学出版部 2008年

マスク、黙食、オンライン〇〇…、コロナ危機は私たちの生活を一変させ、おつきあひも疎遠になり、祝いの儀式も簡略化しました。

本書は武家礼法である小笠原流礼法により、冠婚や五節供などの人生や季節の祝いを詳しく解説した、読み応えのあるバイブルです。理にかんがって美しく、非接触。人と気持ち良く接するヒント満載。しきたりの由来や作法を読み解くと、時代やTPOと共に変化しつつ受け継がれてきた日本の伝統に触れられます。

⇒【水埜 多喜子 (みずの たきこ)】



書名『広告の会社、つくりました』

中村航著 ポプラ社 2021年

1年3ヶ月間務めた広告会社が倒産して、無職となったデザイナー健一。天津功明広告事務所に面接に行ったその場で、コピーライター天津から仕事と留守番を頼まれてしまいます。倒産の遠因にもなった住宅会社のカタログデザインのコンペには、法人格がないと参加できず、じつはそのコンペはもともと大企業の「出来レース」だったことが明らかに！

自分の人生の当事者になること。仕事は一人ではできないことや、楽しいものだったんだ♡と思いついてくれる新鮮な物語です。

⇒【砂塚 寛子 (すなづか ひろこ)】



マンガ・アニメで多文化理解?

～7つの国と地域の学生がお互いの文化を楽しみながら学び・共感したことは～

「東アジア文化都市2019豊島」でも、西安(中国)と仁川(韓国)と豊島区をつないだ一つの文化が日本のマンガ・アニメ。多文化共生の視点で一度読み終わったマンガ・アニメを手にとると…。そこには「相手を知る・自分を知る」新たな発見が!!

「違和感」は、「多文化共生」への入り口

東京外国語大学国際日本語部4年
米村 雪乃 (よねむら ゆきの)



私は幼稚園の頃から「ドラえもん」が大好きでした。漫画は全巻何度も読んで、アニメも録画してセリフを覚えるほど見ていました。弟も同じくドラえもんの大ファンで、一緒に楽しんでいたのを覚えています。それだけ思い入れのあるドラえもんですが、これが研究の題材になろうとは思っていませんでした。

プログラムの中で最も印象に残っているのは、テーマ決めです。自分で考えている段階では、「ひみつ道具」に着目したいと思っていました。昔話がモチーフのひみつ道具、招き猫やタヌキといった動物がモチーフのひみつ道具、だじゃれを使ったひみつ道具など、私が考える「日本文化」がたくさん詰まっていたからです。ですが、結局私たちのグループはのび太の家、すなわち「住居」をテーマにすることになりました。先述のとおり、私は何度もドラえもんを見ています。ですが、一度ものび太の家に注目したことはありませんでした。なぜなら「違和感」を感じたことがなかったからです。これが日本文化の一部だとは気が付きませんでした。韓国人のメンバーが「日本の家は、一軒家が多いのですか?ソウルは、ほとんどがアパートです」と言ってくれたことで、私はそれが日本文化だということに初めて気づくことができました。そしてそれがテーマになったのです。

多くの人、特に多様なバックグラウンドを持つ人たちが集まると、皆が様々なところに「違和感」を持ちます。「違和感」は、溝を深めることもあります。自分とは違うのだという感覚がどんどん溜まり、最終的に「自分の文化はこうなのだから、そっちはこうしろ」というように自分の考えを押し付けるようなことが起こると、大きなトラブルに繋がりがねません。そして厄介なのは、誰がどこに「違和感」を感じているのか、必ずしもわからないということです。逆の視点から見たら、それは当たり前で常に気に留めたこともないものだった、ということも少なくありません。これがまた誤解を生んでいくのです。しかしこのプログラムを通して、「違和感」は必ずしも悪いものではないのだと気付くことができました。「違和感」は研究の入り口であり、ひいては多文化共生を実現する鍵でもあるからです。

当たり前のことながら、多文化共生は文化を画一化することではありません。そして、文化の違いに目をつぶることもないと思います。自分とは違う文化に出会ったときに、その文化について知り、楽しんでいけたら、多文化共生社会への第一歩になるのではないのでしょうか。そして、きっかけは私達の日常生活にあふれています。単なる娯楽として楽しんでいる漫画やアニメも、その一つです。こういった文化の差という切り口から漫画やアニメを見てみると、また違った面白さがあるかもしれません。私はこれからも、多様な文化の中に潜む小さな「違和感」から大きな「違和感」まで、すべて楽しみながら学んでいきたいと思えます。

監修 東京外国語大学 講師 幸松 英恵 (ゆきまつ はなえ)

プロフィール: 専門は日本語学。豊島区図書館経営協議会委員。

東京外国語大学オープンアカデミー短期日本語・日本文化研修プログラム「アニメ・マンガを使って探究をしよう!」受講学生の連載コラム。2022年1月～2月、東京外国語大学にてオンライン日本文化研修が実施された。国内外の学生がZoomで繋がり、アニメ・マンガから日本文化の特徴を探究した。



図書館から見る豊島区の歴史

図書館というものは、これまでどのような道をたどり、今後どのような役割を果たしていくのでしょうか。区制施行90周年を迎えた豊島区の区立図書館が歩んできた歴史を振り返り、未来へ向けた展望をご紹介します。

進化する図書館

～サードプレイス、コミュニティとしての図書館～

大正大学教授・附属図書館長 稲井 達也 (いない たつや)



図書館は社会教育施設であり、生涯学習の場である。しかし、この10年を見渡すと、図書館の役割も大きく変化してきている。それはコミュニティづくりの拠点という役割である。これまで全国のさまざまな公共図書館を見てきたが、特に地方都市においては、まちづくりの一つの手法として図書館に役割を持たせるようになってきている。家庭でもなく、職場でもなく、第3の場所「サード・プレイス」が生きていくうえでは必要であり、図書館もその一つである。

少子高齢化や核家族化により、家族も一人暮らしの人びとも孤立しやすい。コロナ禍による自粛生活が孤立を加速している。孤立という点では、東京も地方都市も大きく変わらない。失われた人々のつながりが生まれる場をつくり出すため、コミュニティ・スペースを併設した複合的な図書館や、書店やレストランを併設した図書館など、さまざまな試みが見られる。たとえば、長野県小布施町立図書館「まちとよテラゾ」は、小学校に隣接した平屋の図書館である。図書館の構想段階から町民が参加し、町と町民が何度も会議を開き、ともに考え、コミュニティの拠点となるような図書館をつくった。明るく光の差し込む館内は広々としていて全体を見渡せる。全てが同じフロアの中にある。さまざまな世代が同じ空間にいることを前提にした設計になっていた。

ただし、気をつけなければいけないことはある。ある地方都市では、お洒落な

図書館の中は多くの人びとがいるにもかかわらず、一歩外を出るとシャッター商店街が広がっているという現実があった。必ずしも成功事例ばかりではないのである。図書館が地域とともに共存していくという、でしゃばりすぎない視点が行政には必要である。

図書館がコミュニティの一つになり得るとは、ただ開館しているだけでは人びとのつながりは生まれにくい。さまざまな仕掛けが必要である。たとえば市民による自主的な講座を支援するというのは、学びの場をつくりだすための一つの仕掛けである。行政が何もかもお膳立てするというサービスの方法では、長くは続かない面がある。

本学では、コロナ禍の中、2020年11月、新たな附属図書館がグランドオープンした。

本学の教育理念である「智慧と慈悲の実践」を踏まえ、地域に公開し、学生、教職員、区民が出会い、ともに学び合う多様性のあるサード・プレイス、学びを軸にしたコミュニティにしようとして計画していた。コロナ禍にあっても、昨年10月には、附属図書館ではSDGsリレー講座を開催し、YouTubeでも配信した。本学の教員、学生や卒業生、外部の講師が登場し、コロナ後を視野に入れた新たな学びの場を提案したつもりである。

私は、公共図書館はもとより、教育資源の一つである大学附属図書館が地域のコミュニティの場として、出会いと学びをつくりだしていくことが大切だと考えている。豊島区という地域の中に、新たな「学びのコミュニティ」が立ち上がることを実現したい。それが豊島区というコミュニティにおいて、「誰一人取り残さない社会」の実現に向けて、大学図書館ができる「小さな一歩」にほかならない。

プロフィール: 1962(昭和37)年東京生まれ。上智大学文学部、筑波大学大学院修了。博士(学術)。都立高校、都立中高一貫教育校など4校で国語科教諭、東京都教育委員会指導主事、日本女子体育大学教授を経て、2020(令和2)年より大正大学教授、附属図書館長。専門は、教育学、国語科教育学、学校図書館学。



大正大学附属図書館



YouTubeでも配信したSDGsリレー講座

中央図書館 特別展示『熊谷守一の世界』

会期 会期：令和4年5月26日(木)まで(中央図書館開館日)

独特な画風で現在も多くの人々を魅了し続ける画人・熊谷守一。中央図書館では、区制90周年を迎える最初の展示として、熊谷守一の世界を紹介しています。52歳から晩年までを千早の地で過ごし、多くの作品を残した守一は、いったいどのような人物だったのでしょうか。

展示のテーマは、「繋がり」。守一が表紙絵を描いた雑誌『婦人之友』を刊行している区内の出版社婦人之友社と、守一の故郷である岐阜県の岐阜市立図書館と豊島区立図書館が繋がり、自然・土地・文字活字を通じた守一の世界をお届けします。展示に合わせ岐阜市立図書館より寄稿・区制90周年のお祝いのことをいただきました。

令和4年度 特別整理期間のお知らせ

以下の日程で休館します。ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力のほどお願いいたします。

- 中央図書館 ... 6月20日(月)～7月3日(日)
※6月27日～7月3日は施設共用部の大規模修繕に伴う休館
駒込図書館 ... 5月9日(月)～5月10日(火)
巣鴨図書館 ... 6月6日(月)～6月9日(木)
上池袋図書館 ... 5月16日(月)～5月17日(火)
池袋図書館 ... 5月23日(月)～5月24日(火)
目白図書館 ... 5月30日(月)～5月31日(火)
千早図書館 ... 6月14日(火)～6月17日(金)
雑誌が谷図書貸出コーナー ... 6月20日(月)～7月3日(日)

岐阜市立図書館より

『モリカズの森』展示によせて

画家の熊谷守一は岐阜市と豊島区にゆかりのある人物です。父の孫六郎は実業家であり、初代岐阜市長に就任した政治家でもありました。守一は岐阜県恵那郡付知(現在の中津川市付知町)に生まれたのですが、父の仕事の関係で3歳から岐阜市で過ごし、17歳で上京して画家の道を歩みました。そのご縁から岐阜市役所の市長室には、守一の書「岐阜」が飾られています。

晩年の守一は、豊島区に建てた自宅で過ごすことが多かったといわれています。昼間は庭で夜はアトリエで過ごし、庭で出会った鳥や昆虫、花などをモチーフに多くの作品を描きました。守一にとって庭は“小さな生き物たち”と暮らす、お気に入りの小宇宙のような空間だったでしょう。

岐阜市立図書館では、この庭のイメージを来館者に感じとってもらいたいと思い、『モリカズの森(ニフ)』と題した展示を製作しました。豊かに生い茂る緑や昆虫は切り絵で作り、花々は写真で飾り、当館に所蔵する熊谷守一関連資料とともに多くの来館者に見ていただきました。製作にあたり、“みんなの森 ぎふメディアコスモス”で開催された『メディアコスモス新春美術館-没後40年熊谷守一展 展覧会画集』を参考にしました。とりわけ、守一の最晩年を取材した写真家・藤森武氏による熊谷守一邸の再現図でイメージを膨らませることができました。

この展示が豊島区と岐阜市のかげ橋となり今後も交流が続くことを願っています。

令和4年度には豊島区制90周年を迎えられるとのこと、末筆ながらお祝いを申し上げます。



岐阜市立図書館展示『モリカズの森(ニフ)』(令和3年度実施)

熊谷 守一(くまがい もりかず) 1880～1977年 岐阜県出身の画家。1932年豊島区長崎町(現千早)に移り住み、生涯にわたり生活する。旧宅地跡に立つ豊島区立熊谷守一美術館では、油絵、墨絵、書など多岐にわたり守一作品が楽しめる。

図書館カレンダー

開館時間

4月 卯月

5月 皐月

6月 水無月

○は土日祝の開館時間
■は休館日

Calendar table showing opening hours for various libraries (Central, Komagatake, Utsunomiya, etc.) from April to June.

新航路 [60]



『図書館の歴史』をのぞいてみました

中央図書館は、オープンして15年が経過したことから、今年の6月に移転後初めて廊下やトイレなど共有部の修繕とリフレッシュルームの壁の塗り替えなどを行います。図書館基本計画(第二次)では、多くの方に来館してもらえる図書館を目指していますので、少しでも気持ちよく利用していただけるよう工夫していきたいと思っています。

先日、図書館の歴史を紐解く機会がありました。東池袋4丁目にあった旧中央図書館を覚えてくださっている方も多いと思いますが、これは昭和54年に開館した施設で、実はその20年ほど前の昭和33年に、旧区役所(東池袋1丁目)の隣の建物(豊島振興会館)の3階に豊島図書館が開館しています。当初は閉架式の図書館(閉架書庫にある本を借りるイメージです)で、個人への貸出が始まったのは8年後の昭和41年でした。また、同じ年、移動図書館「あけぼの号」の運行もスタート。たくさんの本を車に乗せ、区内を巡回しながら皆さんに本をお届けしていました。到着のアナウンスをするとき皆さんの声が集まってくださったそうです。

そして、昭和43年には巣鴨図書館、昭和45年には京宇図書館「ひかり文庫」、さらに昭和46年には千早図書館が開館しました。開館当初は、入り口に長い列ができ、建物の外で大勢の子どもたちが本を読む、「にぎやかな公共図書館」そのままの写真が今も大切に残されています。

豊島区制90周年の歩みの中で、図書館も歴史を紡いできました。次の100周年に向けて、区政の動きを敏感にとらえながら柔らかく、皆さんに親しんでいただける図書館をめざしていきたいと思っています。

編集後記

中央図書館移転時入区4年目の報道担当だった私は、カメラを手に区内を歩き回っていました。「区の魅力を伝え新聞掲載へ!」。今、館内地域資料棚の背表紙を見ると、その時目にした情景や得た知識とつながります。区制90周年、図書館の役割って大きいな...。(坂)

令和4年は豊島区制施行90周年の節目です。これを機会に、『図書館通信』でも、『豊島区立図書館』について今一度見つめなおしていきたいと思っています。新連載も始まって、ますます充実していく『図書館通信』を、どうぞお楽しみください!(新)